
表死された二人

ユン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表死された二人

【Nコード】

N8175Y

【作者名】

ユン

【あらすじ】

ある少年を見かけた少女。

少女は少年と友だちになりたいと願った。

そして…少年・少女の『NARUTO』での生活が…大きく変わっていく。

原作潰します！

ユン

始まり

これは『NARUTO』の世界のとある少女と少年のお話。

少女と少年は…噂の中で…懸命に…二人だけで頑張って行く…。

噂を流した人は…少女の肉親かそれとも…。

チート能力です…多分。

主人公は少女です…いや…二人です…。

原作潰しあります…。

一話一話が短いかも…多分。

一話一話を長くする努力をしていきたいので…頑張って書いていきます。

感想ご意見宜しくお願い致します！多分…『10.5』『20.

5』でお返しができると思います！

作者ユン

1 少年との出会い…そして。

少女「ねえ…なんであの子…避けられてるの？」

男「あの子？…ああ…あの子か…あの子については何も言えん」

少女「なんで？」

男「そういう決まりだ！」

少女「…私…あの子と…仲良くしたい！ダメ？お父さん？」

お父さんと呼ばれた男は少女の言葉を聞き、少女を殴った…いや…平手打ちをした。

父「ふざけんな！仲良くしたいだと！彼奴は…！」

父と呼ばれた男は何かに気づき、口を噤む。

父「…帰るぞ！…いの！」

少女は平手打ちされた頬を摩りながら父の後ろについて行った。

少女…いの…山中いの。

いののは父の後ろについて家に帰ると…母が娘の頬を見て驚いていた。

母「いの！誰にやられたの！」

いの「お父さん」

母「あなた！なんで…いのを！」

父「彼奴と仲良くしたいと言ったからだ！」

母「つな！」

いの「なんで…あの子と仲良くなったらダメなの！あの子が何かしたの！…あの子が！」

父・母「っ！？」

いの「あの子が何かしたの！教えてよ！教えてくれないのなら…言う事聞かないから！」

母「いの…あの子については…極秘とされているの…だから…言えないわ…いの…ごめんね…」

母はそう小さく言い、いのをなだめようと頭を撫でようとした。

いの「触らないで！…お父さんもお母さんも…大嫌い！」

いのは母の手を払いのけ、家を出ていった。

母「いの！」

父「…母さん…止めるな…好きにさせてやれ」

母「でも！」

いの「お父さんもお母さんも…なんで…あの子がおかしたの！…あの子は…私と同じくらいの子供じゃない！なのに…避けらるなんて…悲しすぎる！」

私は家から離れた場所で小さく叫んでいた。

少年「同情？」

後ろから突然声をかけられた。

振り向くと少年が立っていた。

いの「あ…君は…！ど、同情なんかじゃない！私は君と仲良くしたいって心から思った！」

少年「…本当に？」

いの「本当よ！」

少年「友だちになってくれる？」

いの「当たり前！君と友だちになって仲良くしたい！」

少年「ありがとうつてば！…あ…俺つてば…うずまき ナルト…宜しくつてば！」

いの「ナルト…私は…山中 いの！宜しく！ナルト！」

挨拶をして笑いあう二人を影で見ている者がいた。

？「ナルト…良かったのう…」

その者の名は…三代目 火影・猿飛ヒルゼン。

火影「誰かおらぬか？」

暗部「つは！火影様何か！」

火影「ナルトといのを此処に連れて来い」

暗部「え…は、はい！承知いたしました！」

暗部は火影の言葉を聞き、姿を消した。

その後、ナルトといのは暗部に連れられて火影の元へやって来た。
ナルト「火影のじーちゃん！どうしたんだってば？」

いの「あ、あの…何か？」

火影「何、お主たちにある提案をな…」

ナルト・いの「提案？」

火影「お主たち…二人だけで暮らしたりしてみんか？」

ナルト「え？」

いの「良いんですか？」

火影「お主たちが良いのならのお？」

ナルト「いのと二人だけで」

いの「私は…良いよ！ナルトと暮らしたい！」

火影「ナルトはどうじゃ？」

ナルト「いのと…暮らしたい！」

火影「決まりじゃのう」

そして二人だけで暮らす事に決めたナルトといの。
二人の住まいは…なんと…”死の森”だった。

2・二人＋の生活

火影の提案で二人だけで”死の森”へやって来たナルトといの。

ナルト「此処で暮らすんだな…いのと」

いの「うん…二人だけで」

ナルト「怖い？」

いの「ナルトと一緒にだから…平気」

ナルト「いの…俺もいのと一緒にだから…平気だ…」

ナルトと私は…”死の森”を歩いていた。

ナルト「いの…これからどうする？」

いの「取り敢えず…住処を探そうか…ねえ…其処の暗部さん！」

暗部「っ！？」

私は振り返り私たちを監視していた暗部に声をかけた。

暗部「…なんだ？」

私が声をかけた暗部は姿を出し、要件を聞く。

いの「”死の森”には住処になりそうな場所ってあるの？」

暗部「住処になりそうな場所…森の中央部に”死の森”を監視する場所ならある」

暗部はいのの問いに答える。

いの「ありがとうございます…じゃあ、其処に行こ！ナルト」

ナルト「ああ」

暗部「…」

私とナルトは暗部の人を置いてどんどんと”死の森”を歩いていった。

大分歩いたのか”死の森”に入って今、ある程度広い場所についた。

ナルト「…まだまだ先はありそうだな？」

いの「うん…此処らで食料を探さないとね？」

ナルト「暗部の兄ちゃん…いる？」

今度はナルトが暗部に話し掛ける。

暗部「…なんだ？」

いの「この辺に川とかあるの？」

暗部「…ある」

いの「何処に？」

暗部「…ついて来い」

私とナルトは暗部のお兄さんについて行つた。

ついて行くと…川底がある程度ある川がありました。

ナルト「いの…川で何するの？」

いの「ナルト…釣りでしょ…この場合」

ナルト「どうやって？」

いの「そうだなあ…あ！…ちよつと待つてて！」

いの「はそう言いその場を離れた。」

ナルト「…」

暗部「…」

私とその場を離れ…尖った石と綺麗に真つ直ぐ伸びた木をとつてきました。

そして、近くの木に巻きついてあつたツルを使い…槍の完成！

ナルト「いのつてば！すげーな！」

暗部「…」

いの「まあね」

その日、いのは魚を6匹捕まえた。

いの「はい、ナルト…暗部の兄ちゃん」

暗部「え…くれるのか？」

いの「うん、だって暗部の兄ちゃんがこの場所教えてくれたんだから、当たり前じゃないですか！」

暗部「当たり前…か。…ありがとう」

三人で食事をした後、暗部の兄ちゃんは…姿を消した。

いの（多分、火影様に報告かな）

そんな感じで”死の森”での生活が始まった。

3・火影と噂と提案

”死の森”にやってきて3日目になった頃、私とナルトの目の前に数名の暗部の姿が現れた。

ナルト「っ！暗部の兄ちゃんがいっぱい！」

いの「ナルト…落ち着いて…暗部さんたち…何か用ですか？」

？「ナルト、いの…驚かせたのう…」

ナルト・いの「あ！火影のじーちゃん！」

火影「どうじゃ…」死の森”の生活は？」

いの「はい！この暗部の兄ちゃんのお陰で…充実しています！」

火影「ほう…充実とな…それは良い事じゃ！」

ナルト「火影のじーちゃん？今日はどうしたんだってば？」

火影「なあに…お主らが元気にしているか気になってのう…」

いの「…遠眼鏡の術で見ているのかと…」

火影「っ！…いの…それは…何処で？」

いの「…禁則事項です！」

ナルト「いの…禁則事項ってなんだってば？」

いの「…秘密って言う意味だよ…ナルト」

ナルト「へえ…そんな言葉があるんだ！」

火影「話進めても良いか？」

ナルト「え？」

いの「…どうぞ」

そう言い木の根に腰掛ける火影といの・ナルト。

火影「実はのう…里の者が…お主らが死んだつと言うデマを流したのじゃ…」

ナルト「え？」

いの「…そうですか」

火影「ワシがその噂を聞いたのはつい今朝方じゃ…もう里の皆は噂

を聞いておる」

いの「では…そのまま宜しいのでは？」

火影「え…そのままで？」

いの「はい！だってその方がナルトの為にもなるのでは？」

ナルト「俺の為にも？」

いの「…父さんにナルトの事を聞いても極秘とか言っではいけないって言われていました…ナルトには何か秘密にしないといけない事があるんですね？」

火影「…まあ…間違いでは無いのう」

暗部「火影様…」

いの「それが何かは聞きません！…でも…ある提案を承諾して下さい！」

火影「ある提案？…なんじゃ？」

いの「はい！…一つ、今流れている噂はそのままで！…二つ、私とナルトに”死の森”で修行をさせる…3つ、6歳になったらアカデミーに入学させて下さい！」

いのは火影の目を真っ直ぐ見て言い放った。

火影「”死の森”で修行…アカデミーに入学…良かろう…しかし、アカデミーで死んでいない事がバレルぞ？」

いの「偽名を使います」

火影「偽名か…良いのか？」

ナルト「俺はイイつてばよ？」

いの「構いません！」

火影「どんな偽名にするかのう？」

ナルト「いの…決めてイイよ？」

いの「…ナルトは山守ヤマモリ 那路ナルで…私は…山守ヤマモリ 乃衣ノイと名乗ります。

ナルト「イイじゃん！カッコいいつてば！」

火影「良かろう…修行じゃが…二人だけとは…」

いの「暗部の兄ちゃん！宜しく願います！」

暗部「え？…ほ、火影様？」

暗部の兄ちゃんは火影のじーちゃんに助けを求めるが…

火影「ほう…それは良い！」

暗部「そんなぁ…」

いの「…ダメ？」

いのは首を傾げ暗部の兄ちゃんを見上げた。

暗部「う…」

火影「…観念せい」

暗部「…わ、分かりました…やります」

ナルト・いの「やった！」

そして、数名の暗部は姿を消し、火影のじーちゃんと暗部の兄ちゃんだけが残った。

4・偽名での生活

火影「では…自己紹介つといこうかの？」

そう言い暗部の兄ちゃんを見る火影のじーちゃん。

暗部「はい…那路…乃衣、俺の名ははたけ カカシだ…まあ…それ以外の事はこれから自分たちで…知ってくれ」

那路・乃衣「はい！カカシ兄ちゃん！」

二人は笑顔で答えた。

火影「じゃあワシも里へ帰るとするかかう」

那路・乃衣「えっー！」

火影「仕事があるからかう…また会いにくるから、それまで元気なの…」

那路「分かったつてば！」

乃衣「はい！」

そう言い火影のじーちゃんは姿を消した。

カカシ「んじゃあ…早速…修行したいか？」

乃衣「うん！お願いします！」

那路「うん！宜しくつてば！」

カカシ「んじゃあ…そうだなあ…チャクラコントロールでも…始めるか！」

那路・乃衣「はい！」

そう言いカカシ兄ちゃんは足にチャクラを集め、足だけで木を登っていった。

那路「おお！すげーつてば！」

乃衣「出来るかな？」

そう言っている間にカカシ兄ちゃんは5m上まで登り…

カカシ「まずは此処まで！徐々に高さをあげていこうか？」

那路「はい！…まず、足にチャクラを…そして…登る」
乃衣「…すーう…チャクラを足に…はぁー…うん…行こ」

那路は2mで落ちた。

乃衣は4mでバランスを崩した。

那路「け、結構…難しいってば！」

乃衣「まずは集中が必要かも…」

それから二人は別々の修行方法を行った。

那路はがむしゃらに…。

乃衣は瞑想し集中力をあげていった。

カカシ「それぞれ自分にあった修行方法だな…」

その二日後、なんと二人は15mまで登っていった。

カカシ「成長早！まあ…まだ3つ…俺も頑張らんとな」

それから半年…那路・乃衣は凄まじい程の早さで術などを覚えていった。

5・3年の月日が…

カカシ兄さんに”死の森”で修行を見てもらう事…3年の月日が経った。

那路「乃衣…約束の時期だな…」

乃衣「ええ…そうね」

カカシ「さて…火影様の何処に行くか？二人とも？」

那路・乃衣「はい！」

私と那路、カカシ兄さんと火影の場所へ瞬身の術で向かった。

因みにこの時、那路の口癖「つてば」は無くなりました！

瞬身の術で火影の屋敷に着くと、数名の暗部と三代目 火影が待っていた。

火影「おお…那路、乃衣！久々だのう…元気そうだ」

那路「火影様…お久しぶりです！」

乃衣「火影様もお元気そうで何よりです！」

6歳と思えない程の礼儀を見せる二人に火影は涙ぐむ。

カカシ「火影様…約束の時期になりましたので…二人を連れて来ました…」

火影「おお…カカシよ…ご苦労であつたな…どうじゃ？二人の成長ぶりは…？」

カカシ「…まあ…暗部レベルぐらいですかね…一応…私の通名で…忍術も体術も教えましたから…」

暗部ら「我々レベル…」

火影「…やり過ぎじゃないか？」

カカシ「何せ…初めてなもので…」

カカシ兄さんは苦笑いする。

乃衣「あの…約束…」

火影「おお…そうじゃったのう…実はもう登録は済ませてある…」
死の森”から通うのは大変じゃから里の中で暮らしてくれんか？」

那路「里の中で…」

乃衣「…分かりました…」

火影「おお…良かった…そうじゃ！カカシ…もう少しの間一緒に住んでやってくれんか？」

カカシ「…良いですよ」

那路・乃衣「やった！」

二人は手を取り合って喜んだ。

火影「カカシ…好かれたのう」

カカシ「まあ…そうですね…」

5・5 二人の成長ぶり…。

主人公的存在

ヤマモリ
山守 乃衣

表死前の名前：山中 いの

お節介やきのしっかり者

容姿

原作とは違いアカデミーに通っていた頃：肩まで伸びた髪・前髪はペンで留めている。

趣味：那路と力カシと修行

性格：冷静沈着

使用術一覧

口寄せ・森蜘蛛（罨・捕獲）

口寄せ・蝶蛾（幻術）

心読の術

狐狸心中の術

遠眼鏡の術

掌仙術

呪印術・解

瞬身の術

ヤマモリ
山守 ナル
那路

表死前の名前：うずまき ナルト

里の為に九尾の狐を封印された少年。

容姿

原作とは違いツンツンヘアーではなく少し天パ気味（ミディアムヘアー？）

趣味：乃衣と力カシと修行

性格：天然

使用術一覧

口寄せ・九狐（攻撃）

口寄せ・孔雀（幻術）

影分身の術

変化の術

遠眼鏡の術

瞬身の術

呪印術

心読の術

チート能力です！

那路・乃衣は似た技が使えます！

他の術は…禁則事項です！

6・里の中に引つ越し

カカシ「おはよ？ 那路・乃衣…今日から…里に引つ越しだけど…用意出来た？」

那路「うん…出来た」

乃衣「…まあ…巻物に入れたから…カカシ兄さんは？ 出来た？」

カカシ「確かに…出来てるよ…じゃあ…行くか」

那路・乃衣「はい！」

三人は瞬身の術で里に向かった。

里に到着し火影の用意してくれたアパートに行く…私は途中で八百屋と魚屋、肉屋に寄り道し買い物済ませた。

カカシ兄さんは刃物屋？ に行き包丁、鋏、伽石…とか多分調理道具を数点買っていたようだ…那路は…スーパーとかいうところに寄り…ラーメンを数点買ってきた…まあ…麺だけで…具材は買っていないかった。

乃衣「那路…具材は？」

那路「え…買っていないよ…」

カカシ「…まあ…後日スープ買って…具材は…乃衣が買った野菜で良いんじゃない？」

那路「乃衣…ダメ？」

乃衣「…分かったよ」

那路「ありがとう乃衣…」

アパートに着き、巻物を出し、衣類・家具・その他の物を出していく。

那路「…はい…これで…おしまい」

カカシ「那路の方は終わったか…乃衣は？」

乃衣「もうちょい…終わった！」

三人は引っ越しを終え、火影様に挨拶に行った。

火影様の屋敷に着くと…

火影「おお…よく来たのう」

那路「火影様、こんにちは」

乃衣「こんにちは、火影様」

カカシ「どうも…今、引っ越しが終わったので挨拶に来ました…ん？その人は？」

火影様の横には顔に一本傷の付いた男だった。

火影「那路・乃衣…お主らの担任の先生じゃ」

男「海野 イルカです」

那路・乃衣「宜しく願います」

イルカ「えっと…男の子の方が…山守 那路君で女の子は…山守

乃衣さんでしたね」

那路・乃衣「はい！」

イルカ「横にいる人は…？」

カカシ「あ…この子達は両親が居なくてな…俺が親代わりだ…はたけ カカシ」

イルカ「両親がいない…」

乃衣「…事故死です！でも、カカシ兄さんが私たちを引き取ってくれたので、別に両親がいない事にはなんとも思っていないです」

那路「俺も！カカシ兄さんと乃衣がいれば別に気にならない」

イルカ「…そうか」

イルカ先生は少し悲しそうにしていた。

三人は里の住民登録をし終えた。

火影「では…那路・乃衣明日からアカデミーに通ってくれのう」

那路・乃衣「はい！火影様！」

カカシ「では…失礼します」

三人は屋敷からアパートへ帰っていった。

7・え？転校生？

カカシ「そういえば…二人とも…お前たち転校生って事になってるみたいだから」

那路「え？そうなの？」

乃衣「…それで何処からって事に？」

カカシ「まあ…波の国」

那路「あれ？忍者いないよね？」

乃衣「確かに…カカシ兄さんが前に教えてくれたじゃん！」

カカシ「まあ…そうなんだけど…火影様がそういう風に登録したの…」

乃衣「…まあ…そうだったのなら仕方ありませんね」

那路「なあ…カカシ兄さんはこれからどうするの？暗部に？」

カカシ「…まあね」

那路・乃衣「了解！」

三人はアパートに戻り、那路・乃衣は明日からアカデミーに転校する準備をした。

翌日、アカデミーの職員室に行きイルカ先生のところへ行く。

イルカ「おはよう、二人とも」

那路・乃衣「おはようございます」

イルカ先生と教室に向かう。

イルカ「おはよう！皆！昨日帰りに言っていた転校生を紹介する…入っておいで」

那路「波の国から来ました」ヤマモリ 山守 ナル 那路です」

乃衣「同じく波の国から来ました」ヤマモリ 山守 ノイ 乃衣です」

イルカ「皆、仲良くする様に！」

紹介されて席に座る。

那路「…」

乃衣「…」

休憩時間にクラスの人から質問攻めを受けたが…全て無視した二人。

那路「乃衣…行こ」

乃衣「うん…那路」

私たちはクラスから離れて屋上へ足を運んだ。

屋上に着くと…

那路「…あー…なんで質問攻めになんの？」

乃衣「好奇心でしょ？」

那路「…でも、煩くない？」

乃衣「煩かった…明日は声かけてくるかな？」

那路「かけてきても無視」

乃衣「そうだね…疲れるし」

二人はボーッと空を見上げた。

那路・乃衣「空は良いな」

8・二人の誘い

二人が空を見上げていると声をかけられた。

？「あ！先客！」

振り向くとダルそうに頭をかく少年とお菓子を頬張る少年が立っていた。

？「ん？お前ら転校生の？…俺…奈良シカマル…そこ…良い風吹いてるだろ？」

？「こ、こんにちは…僕…秋道チョウジ…シカマル…邪魔したら悪いよ？」

那路・乃衣「…宜しく」

チョウジ「宜しくね…こ、これ良かったらどうぞ？」

チョウジは持っていたお菓子を差し出す。

那路「…いや…良いよ…でも、ありがとう」

那路・乃衣は無視をせず二人に言葉を交わした。

乃衣「…此処は…本当に良い風が吹くね…」

シカマル「だろ？俺さあ…入学式ダルくて此処でサボったんだ！」

チョウジ「…シカマル」

那路「サボりに？バレなかったのか？」

シカマル「お袋にバレた！で、ビンタ食らった」

シカマルは笑いながら話す。

それから四人は休憩時間ずっと空を眺めていた。

休憩時間が終り教室に戻ると授業が始まったが、那路・乃衣にとっては暇な時間だった。

アカデミーのカリキュラムはカカシ兄さんとの修行で済んでいたからだ。

那路（…乃衣…眠い）

乃衣（我慢しなさい！那路）

那路（はゝい）

心読の術で二人は授業中会話していた。

授業が全て終り帰りの支度をしているとシカマルとチヨウジが話かけてきた。

シカマル「この後、時間あるか？」

チヨウジ「…里が見渡せる場所に行こ？」

シカマルとチヨウジは誘いに來たらしい。

乃衣「良いよ…でも…何処で待ち合わせる？」

シカマル「商店街…場所分かるか？」

乃衣「うん…分かる」

チヨウジ「その商店街に花屋”花・やまなか”があるんだけど…その前はどうか？」

乃衣「…わ、分かった…後で那路と行く…」

シカマル「ああ」

チヨウジ「じゃあまたね」

二人は教室から出て行く。

那路「乃衣…」

乃衣「ん？那路どうしたの？」

那路「いや…帰ろうか？」

乃衣「うん」

二人はアパートへ帰っていった。

9・待合せ場所

アカデミーの授業が終り、待合せ場所にいった二人はただ、黙って花を見ていた。

？「お使いかい？」

店の店員と思われる男が話しかけて来た。

乃衣「友達と待合せです」

乃衣は花を見ながら答えた。

？「そう…君はお花好きかい？」

乃衣「…普通です」

？「…そうか」

那路「…あ！友達が来たので」

シカマル「…お待たせ！」

チヨウジ「…はあ…はあ…お待たせ…二人とも…」

シカマルとチヨウジは走ってきたようだ。

？「おお！シカマル君にチヨウジ君！」

シカマル「いのいちおじさん、どうも」

チヨウジ「こんにちは…おじさん」

いのいち「二人の友達かい？」

シカマル「はい…今日、転校してきた二人です」

いのいち「そうか…二人もと宜しくね」

いのいちと呼ばれた男は那路・乃衣に笑顔を見せる。

那路「どうも」

乃衣「…どうも」

乃衣は…居心地の悪い気がしていた。

シカマル「おじさん…ハナいる？」

いのいち「いるよ…ハナ！シカマル君たちが来たよ！」

ハナ「はい！」

奥から自分たちより小さい子が出て来た。

乃衣「…」

いのいち「私の愛娘・ハナだ…ハナ挨拶は？」

ハナ「山中ハナです！宜しくね！」

那路「ああ…宜しく」

乃衣「宜しく」

シカマル「じゃあ行くか！」

チヨウジ「そうだね！」

ハナ「ハナも行く！」

いのいち「シカマル君、ハナを宜しく」

シカマル「…はい」

半ば押し付けられた感じにハナも付いてくるようになった。

ハナ「お姉ちゃん…名前なんて言うの？」

ハナは乃衣に話しかけるが、乃衣は無視していた。

那路「…ごめんな…今ちよつと気分悪いらしい…シカマルとチヨウ

ジ…今日誘ってくれてありがとう…悪いけど俺ら帰る」

シカマル「…そっか…じゃあ…また誘ってやるからその時は…宜しくな」

チヨウジ「またね…二人とも」

那路はそう言い乃衣の手を引っ張ってアパートへ帰っていった。

10・三人の絆

花・やまなかから帰ってきた二人はアパートの部屋からボーツとしていた。

那路「…」

乃衣「…お腹」

乃衣は小さく呟く。

那路「ん？」

乃衣「減った」

そう言くと乃衣のお腹が小さく鳴った。

那路「…何食べたい？」

乃衣「…プチトマト」

那路「…冷蔵庫見てくる」

そう言い立ち上がる那路。冷蔵庫を開けプチトマトを探す。

那路「…無い」

そう小さく呟く。

那路「買ってくる」

那路は玄関に行こうとしたが、乃衣はそれを阻んだ。

那路「乃衣？」

乃衣「あるモノで良い」

那路「ラーメンでも？」

乃衣「…うん」

那路はラーメンを作り始めた。

二人でラーメンを啜りながら、乃衣は自分自身で考え始めた。

乃衣（…山中ハナ…あれは…私の妹？…まあ…いのは死んでいるのだから…妹とは考えなきゃいい…でも…心の準備が…はあ…）

那路（乃衣…？）

乃衣は知らず知らずに心読の術を使っていた。

食事が終り二人でボーツとしているとカカシ兄さんが任務から帰ってきた。

乃衣の様子を見るなりカカシ兄さんは那路に今日の事を聞いた。

那路から事情を聞くとカカシ兄さんは黙って乃衣の頭を撫でた。

それだけで乃衣は良かったようだ。

カカシ「…乃衣、辛い時は辛いつて言っていていいからな…俺や那路はずっと乃衣の側にいるんだから…」

乃衣「うん…ありがとう…カカシ兄さん…那路も心配かけてごめんね」

那路「いいよ…乃衣」

その日、三人は小の字になって休んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8175y/>

表死された二人

2011年11月25日18時57分発行